

セキュリティエンジニアとしての矜持

東芝ITサービス株式会社
マネージドサービスセンター
第二マネージドサービス部 第三担当

白井 暁

私は現在、24時間365日体制でのリモートセキュリティ監視・運用を統括管理する立場である。現在の部門に異動して9年目になるが、以前はハードウェア保守部門の顧客エンジニアとして保守業務に携わっていた。異動前は「セキュリティ」に関する知識はほとんどなく、完全に「セキュリティサービス利用者」側であった。異動直後のバタバタが落ち着き、職場の雰囲気によろやく慣れてきたある日、監視対象のお客様にてマルウェア感染が発生したとの連絡が入った。

「行くぞ！」

当時のリーダーが私に声をかけてきた。一瞬たじろいってしまったが、

「はい！」

と返事し、現地出動の準備に取り掛かった。おそらく「何の役にも立てないだろう」と感じてはいたが、顧客エンジニアとして身に付いた「機動力」が即時反応したのだと思う。

現場に到着すると、今まで見たことがない、騒然とした雰囲気に包まれていた。現地に駐在しているメンバーが引っこり無しに監視用の端末で調査をしては、自席に戻りお客様へ

の報告内容を纏め、更に別の情報を集めるべく再度監視端末へ。その他のメンバーも、お客様からの電話問い合わせ対応や、ホワイトボードに情報整理。その場にいた全員が1つの事象解決に向け、必死に動いていた。

「ほらっ。こっちも早く取り掛かるぞ！」

目の前の光景に呆気にとられていた私を、リーダーが現実に戻した。その後は、デジタル・フォレンジックと呼ばれる調査にて原因や影響範囲等を特定し、お客様への報告を行った。幸い、データ流出などは発生しておらず、報告会終了後にはお客様から労いのお言葉をかけていただいた。現場到着時とは180度異なる、和やかな雰囲気であった。

ただ、私だけは違った。何もできなかったのである。リーダーの指示に従うだけで、慣れない作業から解放された解放感と共に、何とも言えない無力感に苛まれた。ただただ悔しかった。

そこからの行動は早かった。インターネットでセキュリティ調査に関する情報を検索し、参考になりそうな書籍があれば即購入。セミナーがあると聞けば、土日であろうと即参加登録して、いろんな情報を収集した。中にはまったく理解できない内容もあったが、とにかくインプットを繰り返した。そのうち、

自身でも実践できないかと考え、可能な範囲で環境を再現して、見様見真似でセキュリティ解析に取り組んだ。そんなことを繰り返していたら、知らない間にチームの技術リーダーになっていた。

とはいえ、サイバーセキュリティの世界は秒進分歩。今こうしている間にも新しい攻撃手法やそれを調査・防御する技術が生まれている。「セキュリティエンジニアの端くれ」としてインプットを止める訳にはいかなかった。そんなある日のセミナーだった。

「ここにいる全員、日本をサイバー犯罪の脅威から守っているんです！」

それまで、セキュリティ調査手法に関する内容の細かな説明を行っていた講師がこんなことをしゃべり始めた。必死でメモをとっていた私は一瞬「えっ？」と顔を上げた。周りにいた受講者の数名も同じ反応をしていた。しかしその後の講師は再びテクニックに関する解説を再開したため、心に何か引っかかるものがあるものの、再びメモを取り始めた。

セミナーからの帰路、心に引っ掛かった講師の言葉を再び思い返す時間があった。それまで、日々の監視業務では「検知された脅威アラートの解決」に対し必死に取り組んでいた。もちろん解決後も残存する脅威はない

か？については常にチェックしていたが。ただ、その時カスタマーエンジニア時代にお客様からいただいた言葉を思い出した。

「我々は君たちに機器を修理してもらいたいからお金を支払っているんじゃない。我々の業務や、販売した製品を利用しているお客さんに対して貢献してもらってるから、その対価を支払ってるんだ。」

「そうか。そういうことか。」講師の言葉がやっと理解できた。目の前の脅威アラート解決が、回りまわってサービスを利用しているお客様だけでなく「お客様のお客様」、インターネット領域にまで思いを馳せれば、世界中に貢献できているのだ。ただその反面、ちょっとした見落としが回りまわって悪影響を及ぼすことだってありえる。「自意識過剰」なセキュリティエンジニア誕生の瞬間だ。

とは言え、私が日々やるべきことは変わらない。サービスを利用いただいているお客様のセキュリティアラートを監視し、事象を調査し、原因を究明し解決していく。ただ、仕事に対する姿勢は大きく変わった。私は日々の業務を通じて日本を、世界をサイバー犯罪の脅威から守っているのだ。私だけでは守り切れないから仲間を募らなければ。現在、目下「自意識過剰」セキュリティエンジニアの育成に奮闘中である。